

第 3 5 回

宮崎整形外科懇話会

プ ロ グ ラ ム

日 時：平成 9 年 1 2 月 2 0 日（土）1 4：0 0 開会

会 場：宮崎県医師会館 地下大ホール
（宮崎市和知川原 1-101 TEL 0985-22-5118）

会 長：田 島 直 也
宮崎医科大学整形外科学教室

共 催 宮崎整形外科懇話会
住友製薬株式会社

—— 参加者へのお知らせ ——

1. 参加費 ; 会場受付で申し受けます。 1000円
2. 年会費 ; 未納の方は受付で納入お願いします。 5000円
(受付13:30 より)

—— 演者へのお知らせ ——

1. 口演時間 ; 1題6分、討論3分程度とします。
2. 口演用スライド ; 単写とします。演者は講演30分前までにスライドをスライド受付に御提出下さい。

—— 役員会のお知らせ ——

13:20 ~ 13:50 小会議室 (1階)

—— 特別講演のお知らせ ——

17:00 ~ 18:00

『膝蓋大腿関節の機能解剖
—とくに膝内反変形が膝蓋大腿関節に与える影響—』
防衛医科大学教授 富士川 恭 輔 先生

註 上記講演は
日本整形外科学会教育研修会 (1単位)
認定番号 97-0760-00
に認定されておりますので御参加下さい。
日本整形外科学会の研修手帳をお持ちの方は御持参下さい。
尚、受講料は1000円を申し受けます。

—— お問い合わせ先 ——

事務局 宮崎医科大学整形外科学教室内
宮崎整形外科懇話会事務局
担当 川 越 正 一

〒889-16 宮崎郡清武町大字木原 5200
TEL 0985-85-0986 (直通) FAX 0985-84-2931

14:00 開 会

14:00 一般演題Ⅰ.

座長 山田 強一

1. 超高齢者の大腿骨頸部骨折の予後の検討
宮崎市郡医師会病院整形外科 川添 浩史、他
2. 脂肪塞栓症候群の治療経験
宮崎市郡医師会病院整形外科 黒田 宏、他
3. 内分泌異常に続発した20歳の大腿骨頭すべり症の1例
済生会日向病院整形外科 森 治樹、他
4. 脳性麻痺児の術後骨折
県立こども療育センター 前田 和徳、他

14:40 一般演題Ⅱ.

座長 平川 俊一

5. 胸腰椎破裂骨折に対するKaneda deviceを用いた前方除圧
再建術の経験
宮崎医科大学整形外科 池尻 洋史、他
6. 腰椎椎間関節に発生したsynovial cystの1例
宮崎医科大学整形外科 益山 松三、他
7. 治療に難渋したmental retardationを伴った症候性後側弯
症の一例
宮崎医科大学整形外科 河野 立、他
8. 股関節周辺腫瘍切除後の欠損に対する大腿後部皮弁の使用
経験
宮崎医科大学整形外科 安藤 徹、他

15:20 主題：高位脛骨骨切り術

座長 桑原 茂
帖佐 悦男

1. 当院における高位脛骨骨切り術の術後成績
- H T O 骨プレートでの短期成績 -
県立延岡病院整形外科 河原 勝博、他
2. 当院における膝関節障害に対する外科的治療
県立日南病院整形外科 黒沢 治、他
3. 変形性膝関節症に対する高位脛骨骨切り術による治療経験
渡辺整形外科病院 本部 浩一、他
4. 当科における内側型変形性膝関節症に対する高位脛骨骨切り術の長期成績 - 術後10年以上経過例について -
宮崎医科大学整形外科 園田 典生、他
5. R A 膝に対する高位脛骨骨切り術の経験
国立療養所宮崎病院整形外科 内田 秀穂、他

—— 討 論 ——

—— 休 憩 ——

17:00 特別講演 座長 田島 直也

『膝蓋大腿関節の機能解剖
- とくに膝内反変形が膝蓋大腿関節に与える影響 -』
防衛医科大学教授 富士川 恭 輔 先生

18:00 閉 会

開 会 (14:00)

一般演題 I. (14:00~14:40) 座長 山田 強一

1. 超高齢者の大腿骨頸部骨折の予後の検討

宮崎市郡医師会病院整形外科

○川添 浩史
山口政一朗

黒田 宏

社会の高齢化に伴い90歳を越える超高齢者に対する手術機会も増えてい
る。今回、超高齢者の大腿骨頸部骨折の予後について検討したので報告す
る。対象は、平成4年10月から平成8年7月までに当院で手術を行った90
歳以上の大腿骨頸部骨折73例のうち、一年以上の経過観察が可能であった
67例で、男性9例、女性58例であった。年齢は90歳から101歳、平均92.7
歳。骨折の内訳は内側骨折18例、外側骨折49例であった。調査時死亡は35
例(52.2%)であり、手術が直接の影響を与えと言われている一年以内
の死亡例は7例(10.4%)で、それらのほとんどが来院時有意であった合併
症が重篤なものであった。生命表から算出した期待生存率と実際の一年生
存率の間には差はなかった。手術自体は適切な全身管理を行えば超高齢者
の生命予後に悪影響は与えないと考えられ、積極的に手術を行い早期離床
を図るべきと思われる。

2. 脂肪塞栓症候群の治療経験

宮崎市郡医師会病院整形外科

○黒田 宏
川添 浩史

山口政一朗

当院において経験した脂肪塞栓症候群について報告する。平成8年7月
1日より平成9年9月30日の15ヶ月間に当院に骨折を主訴に入院となった
430例中、鶴田の診断基準にて脂肪塞栓症候群と診断できたのは4例(0.9
%)で、男性2例、女性2例、年齢は16~56歳、平均34.3歳であった。骨
折数別にみると1ヶ所337例中1例(0.3%)、2ヶ所55例中2例(3.6%)、
3ヶ所以上38例中1例(2.6%)で、いずれも下肢長管骨の閉鎖性骨折であ
った。治療は全例に酸素投与を行ったが、人工呼吸器管理を必要としたの
は1例のみであった。不隠の強かった1例に対しては発症日に創外固定にと
よる固定を行ったが、他の3例は牽引もしくはシーネ固定を行い、4例と
も病状の軽減するのを待って内固定術を施行した。

3. 内分泌異常に続発した20歳の大腿骨頭すべり症の1例

済生会日向病院整形外科

○森 治樹 酒井 健

同 脳神経外科

森田 信二
梶原 秀彦

巖本 哲矢

【はじめに】思春期以降に発生する大腿骨頭すべり症は、そのベースに何らかの内分泌的異常が存在することが示唆されている。今回、我々は、下垂体腺腫に続発した大腿骨頭すべり症の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】20歳、男性、身長183cm、体重88kg、陰毛(-)、陰茎矮小、女性様声音、(X-P)では全身性に骨端線閉鎖不全がみられ、トルコ鞍にはbalooningが見られた。内分泌検査では、Growth Hormon(GH)、ACTHの基礎値は正常範囲で、response(-)、反対にLH、FSHの基礎値は、低値でresponse(-)であり、相対的にGHに対し性ホルモンが低値を示した。頭部MRIではトルコ鞍部にcystをともなった腫瘍が確認された。

大腿骨頭すべり症発症形式はchronic typeで左大腿骨頭のposterior tilt angle(PTA)は25度で、in situ pinningを行った。下垂体腺腫に対しては除圧術を行った。現在のところ合併症もなく術後経過良好である。

【考察】本例では、下垂体腺腫によりGrowth Hormonと性ホルモンとのバランスが崩れ、それゆえに成長軟骨帯の成熟を抑制し力学的結合が緩んだ結果、すべりを生じたと考えられた。

4. 脳性麻痺児の術後骨折

県立こども療育センター

○前田 和徳 山口 和正

宮崎医科大学整形外科

渡辺 信二
田島 直也

川越 正一

【目的】脳性麻痺児(以下CP児と略す)に見られる骨折は、重度児、抗痙攣剤内服者、廃用性骨萎縮を伴う症例に多く見られる。今回当センターにて、筋解離術等の手術施行後に認められたCP児の骨折にたいし発生要因、対策等を検討したので報告する。

【対象と方法】対象は当センターで術後約1年間程度の期間に発生したCP児骨折8例11骨折で男4例、女4例。初回骨折時平均年齢は6歳11ヶ月、追跡期間平均2年、骨折部位は大腿骨9例、脛骨2例。調査項目は、臨床症状、受傷機転、レントゲン所見、治療法と骨折後経過等であった。

【結果】症例はほとんど全介助に近い重度児で長期抗痙攣剤服用者に多く骨折は臼蓋の被覆状態が悪く可動域制限が強い方に認められた。重度児の手術に際しては、術後骨折の危険性を考慮し家族にも十分に説明しながら治療をしていく必要がある。

一般演題Ⅱ. (14:40~15:20) 座長 平川 俊一

5. 胸腰椎破裂骨折に対するKaneda device を用いた前方除圧再建術の経験

宮崎医科大学整形外科

○池尻 洋史 田島 直也
久保紳一郎 作 良彦
黒木 浩史 後藤 啓輔
濱田 浩朗 河野 立

今回当科にてKaneda device を用い前方除圧再建術を行った胸腰椎破裂骨折3例を経験したので文献的考察を加え報告する。

【症例1】54歳、男性、L2破裂骨折(Denis TypeB)。工作中、背部に木材が落下し受傷。術後FrankelCがDに改善、16ヶ月経過した現在、良好なalignmentを保ったまま骨癒合が完成した。

【症例2】47歳、男性、L3破裂骨折(Denis TypeB)。パラグライダー飛行中約10mの高さから落下し受傷。術後良好なalignmentが得られ、FrankelCがEに改善した。

【症例3】30歳、男性、L2破裂骨折(Denis TypeE)。工作中高所より転落し受傷。術後FrankelCがDとなり、整復状態も良好であった。

術後、3症例ともに良好な脊柱alignmentが獲得でき、また神経症状も改善した。本法は胸腰椎破裂骨折に対し有用な術式である。

6. 腰椎椎間関節に発生したsynovial cystの1例

宮崎医科大学整形外科

○益山 松三 田島 直也
久保紳一郎 後藤 啓輔
作 良彦 黒木 浩史

【目的】腰椎椎間関節のsynovial cystによりradiculopathyを呈した1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】60歳女性。両下肢外側の頑固な疼痛、左下肢しびれを主訴で近医受診。MRIにて硬膜外腫瘍を疑われ、当科紹介となった。当院MRIにて、両側椎間関節(L5/S1)の肥厚性変化、関節内嚢腫を認め、またL5/S1椎間板ヘルニア(左外側型)も認めた。責任病巣確定のため、椎間関節造影(1t)施行したところ、疼痛の再現性を認めたので嚢腫による症状と判断し、両側開窓術及び嚢腫摘出術施行した。術後疼痛、しびれの改善をみた。

【結語】synovial cystに椎間板ヘルニアを合併し、確定診断に椎間関節造影が有効であった症例を報告した。

7. 治療に難渋したmental retardationを伴った症候性後側弯症の一例

宮崎医科大学整形外科

○河野 立 田島 直也
作 良彦 濱田 浩朗
川野 彰裕

【目的】mental retardationがある患者では、意志の疎通がはかれず、神経学的所見も得ることが困難なため、治療に難渋する。最近我々はmental retardationを伴った症候性後側弯症の一例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

【症例】17才、男性。主訴：歩容異常。現病歴：出生時より水頭症を認めシャント術を受ける。昭和61年（5歳時）近位にて側弯症を指摘され、当科外来を紹介受診された。初診時、全脊椎単純X線正面像にてTh1-Th8-Th12においてCobb角 40° 、 40° であった。装具療法施行するも増悪傾向を認め、牽引療法にも抵抗性であった。平成7年より後弯変形も生じ、歩容異常も出現し始めた。X線上、側弯角Th11-L1-L5において 37° 、 96° 後弯角はTh11-L4において 112° であった。平成9年7月7日、Spinal instrumentation (TSRH system) を使用し、腓骨によるstradbone graft をTh11～仙骨に用いた脊椎固定術を施行した。術後経過は良好で、現在独歩可能である。

本症例のように、脊椎の高度変形を認めた場合、手術療法は矯正による脊髄損傷、体幹バランスの不均衡化を招く危険が高く、進行防止と体幹バランス保持を主眼にADLの維持を目的として施行すべきと考える。

8. 股関節周辺腫瘍切除術後の欠損に対する大腿後部皮弁の使用経験

宮崎医科大学整形外科

○安藤 徹 田島 直也
 帖佐 悦 川越 正一
 柏木 輝 園田 典康
 蛭原 啓 石田 康行
 江夏 剛 結城 祥一
 福田 健 末永 治
 本 康 治
 沢 典 治
 黒 治

ふくだ整形外科
 古賀総合病院整形外科
 県立日南病院整形外科

骨髄炎、腫瘍切除後などの股関節周囲皮膚軟部組織欠損はその再建術に難澁することが多い。今回我々は股関節周囲皮膚軟部組織欠損は、大腿後部皮弁を用いて再建を行った症例を報告する。昭和54年近医で摘出術後放射線治療施行。以後9年当科にて掻爬術施行。欠損部に洗浄な深動脈穿通枝を用いた筋皮弁術を行った。【症例1】49歳、男性。昭和40年発症の右白蓋部を併発し、複数施設にて保持した。平成7年発症の左大腿転子部周囲の平滑筋肉腫に對し他科にて摘出術を行おうも同部に再発、骨頭への浸潤を認めため、平成9年拡大摘出術と下肢再建術を施行。欠損部には左下殿動脈下行枝を用いた筋皮弁術を行った。2症例とも大きな欠損部に対し筋皮弁を用いた再建後は良好な外観を呈し、機能的改善も得られた。症例を供覧し、若干の文献的考察を加え報告する。

主題：高位脛骨骨切り術（15：20～16：50）

座長 桑原 茂、帖佐 悦男

1. 当院における高位脛骨骨切り術の術後成績 —HTO骨プレートでの短期成績

県立延岡病院整形外科

○河原 勝博 谷脇 功一
木屋 博昭 弓削 孝雄
田口 学 中川 徳郎
仙波 圭

【目的】変形性膝関節症に対して高位脛骨骨切り術(HTO)は確立した手術法であり、その固定方法や術後成績に関して多くの報告がされている。我々は1996年4月以降この手術法に対して、SULZER MEDICA社製のHTO骨プレートをを用いている。今回は短期ではあるが、術後成績を検討したので報告する。

【対象および方法】1996年4月から1997年8月までに施行した17例21膝（男性1例1膝、女性16症例20膝）のうち術後直接検診ができた16例18膝（男性1例1膝、女性15症例17膝）を対象とした。平均年齢67.8歳（57歳～84歳）、術後平均観察期間7.6ヶ月（3ヶ月～16ヶ月）である。これらに対して術前術後のJOA score、FTA、関節可動域などを調査した。

【結果】JOA scoreは術前60.0点から術後85.6点に改善し、疼痛・歩行能、疼痛・階段昇降能にてその改善が著しかった。FTAは術前187.3°から術後171.4°と矯正されていた。関節可動域は術前平均、屈曲122.8°伸展-4.7°術後平均屈曲120.0°伸展-3.2°と著大な変化は見られなかった。

2. 当院における膝関節障害に対する外科的治療

県立日南病院整形外科

○黒沢 治 長鶴 義隆
柳園 賜一郎 長田 浩伸

平成4年11月より平成9年10月の間に当院で行った膝関節障害に対する観血的治療は7例で、疾患は変形性膝関節症5例、膝蓋軟骨軟化症1例、大腿骨内顆無腐性壊死1例、男性1例、女性6例、平均年齢64.1歳であった。内訳は脛骨粗面移動術3例、高位脛骨骨切り術2例、人工関節置換術2例であった。手術前後を日整会OA膝治療判定基準で比較すると、それぞれ75点から76.7点へ、30点から70点へ、50点から75点へ改善を認め患者の満足度も高かった。今回我々は個々の症例を呈示し当院における手術適応と手術手技について高位脛骨骨切り術を中心に発表する。

3. 変形性膝関節症に対する高位脛骨骨切り術による治療経験

渡辺整形外科病院

○本 部 浩一 渡辺 雄
大 田 博人 長田 浩
谷 島 満 野 中 隆
史

変形性膝関節症に対する高位脛骨骨切り術は近年広く行われ、その成績も良好で適切な矯正が得られれば長期にわたって良好な成績が得られる。今回当院における治療結果について検討した。手術時年齢は56歳から69歳（平均64.4歳）であった。全例大腿骨脛骨角（以下FTA）を指標として楔状骨切りを行い、固定材料は創外固定1例、創外固定+ステープル3例、ステープル1例であった。経過観察期間は8ヶ月から5年10ヶ月（平均3年）であった。

【結果】術後FTAは167°から172°（平均168.6°）に矯正されており経過中若干のFTAの増加を認めた症例が見られるが臨床的には概ね良好な結果が得られた。

4. 当科における内側型変形性膝関節症に対する高位脛骨骨切り術の長期成績 —術後10年以上経過例について—

宮崎医科大学整形外科

○園 田 典 生 田 島 直 也
帖 佐 悦 男 柏 木 輝 行
松 岡 知 己 栗 原 典 近
田 島 卓 也 江 夏 剛
長 鶴 義 隆
武 内 晴 明

県立日南病院整形外科
熊本市市民病院リウマチ科

当院にて内側型変形性膝関節症に対して高位脛骨骨切り（以下HTOと略す）を施行し10年以上経過した症例について追跡調査を行いその長期成績を検討した。対象は当院にてHTOを施行した症例中、今回直接検診が可能な4名6膝である。手術時年齢は63.5歳であり手術から直接検診までの期間は平均11年5ヶ月（10年1ヶ月～12年2ヶ月）であった。これらの症例について臨床症状、X線学的計測（FTA、脛骨軸傾斜角）結果の変化を検討し成績良好例と不良例に分けて成績を左右する要因について考察した。また現在当院にて施行している術式について文献的考察を加えて報告する。

5. RA膝に対する高位脛骨骨切り術の経験

国立療養所宮崎病院整形外科

○内田 秀穂 金井 純次
桑原 茂

RA膝関節病変を有し変形を来した5例7関節に対し高位脛骨骨切り術と滑膜切除術の併用を試みたので報告する。いずれも病歴の長い比較的行ったRA例であるが、膝関節の変形は内反変形で変形性変化が主体と考えられるものである。経過観察期間は2年3ヵ月から7年であり、全例膝関節のRA病変の悪化により人工膝関節置換術を行わざるを得なかつた。RAにおいて膝関節の病変の主体がいずれであつても関節温存手術により長期優れた結果を得ることは困難であり、RAに対する本法の適応には慎重であるべきであるとの結論を得た。

——— 討 論 ———

——— 休 憩 ———

特別講演 (17:00~18:00)

座長 田島 直也

『膝蓋大腿関節の機能解剖
—とくに膝内反変形が膝蓋大腿関節に与える影響—』
防衛医科大学教授 富士川 恭 輔 先生

閉 会